

ふかしろじゅんろう

深代惇郎著「深代惇郎の青春日記」朝日新聞社、1978年9月30日刊を読む

## ロンドン風景－公園、慈善、譲り合い、台所の立派さ、無責任なことは言わない－

&lt;ロンドン&gt;

1. さて、このロンドンには、ピラミッドのような眼を奪う代物は見当りません。ウェストミンスター寺院も、議事堂も、ロンドン塔も、ウィンザー城も、ピラミッドの前では卑小なものです。五千年後、イギリス見物にきた人は何を見るんでしょうか。歴史のお土産はあっても、ピラミッドのように歴史そのものを厳然と語るものはなさそうに見えます。
2. しかし、結論をいうなら、僕自身は、非人間的なまでの偉大さを語るピラミッドより、後世にあまり持ち合わせのなさそうなロンドンに肩をもちたくなります。
3. そこで、どこでも見かける二、三のロンドン風景をお知らせしましょう。うわさ通り、公園がたいへん美しい。この大都会の真ん中で、馬を走らせたり、サッカーが出来るのも公園です。犬をつれた老人が日だまりでぼつねんと腰かけています。過ぎ去った日の感慨にふけているのかも知れませんが、見る人にはさびしい影を感じさせます。
4. 次に強い印象だったのは慈善についてです。先日、映画館で行列していたら、乞食(といっても服装はわれわれと大差ありません)＝当人にいわせれば機会に恵まれなかった音楽家＝が、バイオリンをひいて回ってきました。僕の見える範囲の十数人は一人残らず、一ペンス(四円)、二ペンスを帽子に入れていました。四階級ある席の一番安い切符を買おうと、三十分も並んでいる人たちです。
5. 学校の教室にも、大きなボール紙の箱があって、おしゃべりをやめない生徒に先生が渡します。何ペンスかを入れるこの箱も慈善用です。ポピーデーに街頭に大ぜいの人が立って募金を呼びかけます。といっても日本の赤い羽根のようにわめくわけではなく、ときたま募金箱をがちゃんがちゃんとゆすって通行人の注意をひく程度です。それでも、街は、赤いポピーの飾りをつけた人で景色がちょっと華やぐほどになります。
6. つぎに、人が「譲り合う」ことです。席をゆずり、道をゆずります。厳格にいうなら、女にはゆずり、男同士では「お先に(after you sir)」ということ。タイムズのビルのせまい廊下でも、ドアがあって向うから人がくれば、必ず戸をあけて、相手を先に通します。これは汽車でも、食道でも、バスでもすべての日常生活で行われています。そして、「ソリー」「サンキュー」といいます。
7. いまの下宿(四人家族)で驚いたのは、台所の立派なことで、二部屋、わが家全部の広さに匹敵します。その他の部屋は居間にしろ応接間にしろ、日本の洋式中流家庭と大差ありませんし、生活もつつましいもの、ラジオは十八年も使っているし、車は五十一、二年のものです。

8. 先日、ハイパークの演説を聞きにいきました。原水爆反対を五、六十人の聴衆を前に弁士がぶっていました。ヤジもひやかしもないようです。議論沸騰でさわがしくなると、弁士が「listen my friends」といい、みんな一応だまります。聴衆の間で議論が分れ、その横に場所を移してけんけんごうごう、五、六人がやり合い始めました。そのとなりは、黒人の「アフリカ解放論」。つぎが共産党、メソジスト、救世軍、カソリックと、十三組やっていました。おまわりが四、五人いましたが、喧嘩させないためということです。

9. 惨敗した労働党が先月末大会を開きましたが、ゲイッケルのあいさつの冒頭は「われわれが掲げた政策は、政権をうればすべて実現可能なものであることを確信する」という言葉でした。無責任なことはいわなかったということの再確認でしょう。

P153 ~ 155

[コメント]

朝日新聞の名コラムニスト、46歳で亡くなる直前まで「天声人語」を書き続けた深代惇郎氏のロンドン留学時代の文章。イギリスのよさ、イギリスから学ぶべきことをよく書き表している。

— 2013年4月29日 林 明夫記 —